

構成力を高める読書感想文の指導

—効力感に着目して—

How to raise composing abilities in writing book reports

—Effects of self-efficacy—

西 山 由美子 (附属中学校)

Yumiko NISHIYAMA

抄録

中学生の文章表現能力の伸長を図るためのカギの一つは、「構成に対する評価力」を育てることにあるという論については、本紀要No.2に示した。今回の論考では、前回の論に基づき、平成5年4月に入学した生徒40名の生徒の作文自己評価力の変容を追うことにより、構成力を高めるための読書感想文指導のありかたを考察してみたい。

研究の対象者である40名の生徒は、1学期の創作文の指導を通じて「起承転結」の構成に関する学習を経験している。今回の実践では、あらずじに終始する生徒が大半を占めた読書感想文(夏休みの課題として出題)を取り上げ、構成力を高めるための手立てについて1試案を提示してみたい。具体的な方法としては、学習過程の中間段階で「構想発表会」を設定することにより、構成に対する効力感を高めることを試みた。そして、各々の生徒の作文の能力と自己評価力の両面から、構成力の高まりを考察する。

キーワード： 国語科教育 作文指導 構成力

1, はじめに

生徒個々の文章表現能力は、その作品が主な評価の対象とされ、作品のみによって、個々の作文の能力が判断されることが多かった。しかし、中学生という発達途上の段階からしても、文章表現に対する生徒個々の認識の実態を抜きにして、作品のみを取り上げることは、個とかけはなれた指導に陥る危険性を秘めている。そこで、生徒個々の、自己の作品を評価する力(自己評価力)の生成過程を追い、認識の深化を調査することにした。そして、自己評価力の実態と、実際の作品との二面から、個々の文章表現能力の変容を探ってみた。

1クラス40名の中学3年間にわたる変容を追った結果、文章表現力の伸長を図るカギとして、構成に対する評価力が浮かび上がってきた。入学当初は、その文章表現力に大差のなかった数名の生徒が、卒業時にかなりの差を示した要因の一つとして、構成に対する評価力の如何が大きく関わっていることが判明したからである。

そこで、「構成に対する自己評価力を高めること」を研究のテーマとして、中学生の文章表現指導を積み上げてみることで、どのような変容が見られるかを探ってみたいと考えた。対象となる生徒は、平成5年4月に入学した40名（男子20名・女子20名）である。本論考の基底となる実践は、学習過程の中間段階で構想発表会を3時間設定し、構成に対する効力感※を各自に持たせることを試みたものである。その過程を通して、作文能力と自己評価力の高まりを考察する。

※効力感・・・「そこで努力すれば、あるいは行動すれば環境に好ましい変化をもたらすことができるという見通しとそれに伴う感情」⁽¹⁾（注・稲垣佳代子）

2, 今回の取り組み

- ① 題材 「感動をみんなに伝えよう —— 世界の国の子どもたち ——」
- ② 対象 1年生□組（男子20名・女子20名）
- ③ 日時 平成5年11月
- ④ 題材と研究仮説

生活様式の多様化、受験勉強の激化などの影響によって、生徒たちには「読むこと」「書くこと」の機会が少なくなっている。このような現状の中で、読書の意義について認識させることは重要である。読書によって、知識を広め、情操を豊かにし、さらに思考力を鍛えていくことは、人間形成に大きな役割をはたすものである。そして、読書の効果をいっそう高めるところに読書感想文指導の目的がある。読書感想文を書くことによって作品の内容をより深く理解し、そして、自己と作品との対話の中で、新しい真実の発見や自己の発見が可能になるのである。

さて、入学して半年を経過した生徒たちは、まさに少年期の入り口にある。この時期にこそ深く価値の認識できる作品を読ませ、人生の真実を深く見つめることのできる機会を与えたい。そういう願いで、「世界の国の子供たち」という単元を設定した。恵まれた環境に生きる生徒たちに、さまざまな世界の状況に目を向けさせることで、視野を大きくもたせたい。そして、世界の国に生きる子らの中に、自分の現状と共通するもの、異質なものを見極めさせることで、思考力を鍛えさせたい。

対象とする図書については、生徒の能力や興味・関心、問題意識等に適応させることをねらって、次の5作品の中から選択させることにした。

「あそこはフリードリヒがいた」	リヒリー作
「にんじん」	ルナール作
「飛ぶ教室」	ケストナー作
「ふたりのロッテ」	ケストナー作
「車輪の下」	ヘッセ作

さて、実際の読者感想文を書く際には、何らかの手立てを講じていく必要がある。まず書くことの分からない子には、深く読み取る力を養う必要がある。そこで、文章の中から筆者の言いたいことを読み取り、それに対する感想を持つことを、教科書教材「少年の日の思い出」で練習させた。また、材料集めの手段として、読書活動の段階で印象の強かつ

た表現・語句などをカードにメモさせた。書き方の指導については、適時「学習の手引き」を使用した。

また、学習過程の中間段階で「構想発表会」を設定し、構成に対する効力感を持たせ、学習活動全体に対する意欲づけを図ろうとした。そのことが、生徒各自の構成意識の変容にどう寄与するかについて考察したい。研究の対象としては、次の4つを取り上げる。

- 1, 習作（短作文）「少年の日の思い出」を読んで
- 2, 構想表完成時自己評価
- 3, 実作（読書感想文）
- 4, 読書感想文完成後自己評価

研究仮説

文章表現過程の構想段階で、構成に対する効力感を持たせる指導を試みれば、生徒個々の構成に対する評価力が育ち、文章表現能力は高まるであろう。

⑤ 学習目標

- ・自分の心に強く印象に残ったことや感動したことを明確に伝えるために、構成に注意して書く態度や技能を養う。
- ・構想の報告会を通して、自分の考えや感想をより確かなものにし、相互の向上を図る。

⑥ 学習計画（全22時間）

教 材	時間設定	形 態	学 習 活 動
1次（5時間） 「少年の日の思い出」	読解 4時間	一斉	客が思い出を語り始める部分の、時間の経過に伴って変わる情景描写を読み取る。
		個別	「少年の日の思い出」を対比の表現に注意して読み、作品の主題を予想する。
	短作文 1時間	個別	作品の素晴らしさを伝える感想文を書く。
2次（17時間） 「世界の国の子どもたち」	図書選択 1時間	グループ	単元の目標や計画について知り、題材とする作品を各自選択する。 （学習の手引き・その1）
	読書 4時間	個別	選択した作品中、印象に残った表現や語句などをカードにメモしながら、各自読書する。 （学習の手引き・その2）
	主題決定 1時間	個別 指導	手引きに従って、作品の主題を予想し、感想文の主題を決定する。 （学習の手引き・その3）
	構想 2時間	個別	書きたい材料をカードに書き出し、「作品・意見・考え」の別を書き加えて、構想を練る。 （学習の手引き・その3）（構想表）
	●発表会 3時間	一斉	選択した作品別にグループに分かれ、グループの代表者2名ずつが構想を発表し、意見を交流する
		グループ	作品別グループで、構想を互いに評価し合う。 （個別評価カード）
	構想推敲 1時間	個別	相互評価をもとにして、各自の構想の見直し、書き加えをする。

記述と 推敲 4 時間	個別	構想表に基づき、原稿用紙に記述する。出来上がった生徒から順に、指導者と面接し、過不足はないか検討する。
自己評価 1 時間	個別	「うまく書けた点」「もうすこしと感じる点」などについて自己評価する。 (自己評価カード)

⑦ 14・15時間目の学習過程

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1, 本時のねらいについて知る。	・各グループからの発表を聞き、自分の言いたいことを明確に伝えるための工夫点について、意見交流することを知らせる。
2, 各グループの代表者の発表を聞く。	・自分の構想の概略を説明し、「ちょっと自信のあるところ」「うまくいかないところ」をそれぞれ発表する。 ・それぞれの構想のよいところを発見し、さらに工夫すればよい所を指摘し合う。
3, 意見を交流し合う。	・書き出しのしかた、結びのしかた、主題の展開のしかたなどについて、意見を交流し合う。 (発表しなかった者は、カードで評価し、発表者に渡す。)
4, 意見を聞き、カードの書き加えや並び換えをする。	・元の構想表と比べながら、カードの並び換えや書き加えなどをさせる。

⑧ 使用した資料・学習の手引き(手引きその1・その2は、紙面の都合上省略)

—学習の手引き・その3—

- ・主 題
- ① 作品全体を通して、最も強く受けた感動
 - ② 作者のものの見方・考え方に対する感動
 - ③ 主人公の生き方や考え方に対する共感(言葉や行動を通して)
 - ④ 作品のプロット(時代・場所・事件)に関する印象

などの点から、最も強く印象に残ったことは、次の点です。

- (1) 心ない大人がつくった車輪に有望な少年ハンスの心がふみにじられる。

—————(以下、A子の記述より引用)—————

わたしは、(1)のことに対して、次のような考えや意見を持っています。

- (2) 主 題 子供の心をふみにじるのは大人たちである。

わたしは、読み手に、次のように、自分の考えを受け取ってもらいたいと思っています

- (3) 大人の勝手な見栄が子供の心を傷つけてしまった。

・取材(材料探し)

主題を支える、自分の感想・考え・訴えを書き出してみよう。また、その根拠となる文章中の表現や事件などを抜き出してみよう。

- ・自分の意見・考えは、次のような点から思い浮かべてみるとよい。ただし、全部書く必要はない。

「○ア、本を閉じて浮かぶこと。

イ、読んで分かったこと、心に残っていること。

ウ、作者が読者に訴えようとしていること。

○エ、題名から思ったこと。

オ、自分の今までの経験と比べて似ているところがあるなら、どんなところか。

力、本を読んで、自分がどう変わったか。

キ、作者はどのような人か。

ク、今までに読んだ本と比べてどう思うか。

①〇ケ、もし、自分ならどうするか。

(○は, A子による)

—学習の手引き・その4—

- ・題名
- | | | |
|----|-------------|------------------|
| ア、 | 主題や内容を暗示する。 | 「人間失格」「少年の日の思い出」 |
| イ、 | 中心人物や事物を表す。 | 「坊っちゃん」「老人と海」 |
| ウ、 | 中心となる場所を表す。 | 「城の崎にて」「遠野物語」 |
| エ、 | 主要な題材を示す。 | 「トロッコ」「高瀬舟」 |

- ・書き出し 「ぼくが、この本を読んで思ったことは・・・」などではなく、工夫してみよう。次のようなことがらから書くこと。

「ア、その本を読むようになったきっかけから。」

イ、一番心に残ったことから。

ウ、自分が思ったこと、自分がみんなに最も訴えたいことから。

└エ、文中で解決していきたい疑問点から。

- ・ 結 び 「おもしろかった」「感心した」といった類の言葉で簡潔にまとめないこと。
書き出しと関連づけた書き方にするのもよい。

「ア、文章読んで、新たにどういうことを知ったか。」

イ、自分のものの見方・考え方がどのように変わったか。

ウ、本を読んで知ったことをこれからどう生かしていきたいか。

「エ、もう一度、一番言いたいことをまとめて、あるいは、呼びかけて。」

[illegible]

3, 表現能力表

総合判定のAA・A・AB・B・BC・Cは、AA側が上位の表現能力、C側が下位の表現能力を有することを示す。なお、紙面の都合上、表の一部のみ、掲載する。

表現能力評価表

A：敬体・常体／基礎的表記
B：簡潔な文体
C：比喩や比較の使用
D：段落づくり
E：主題の明確さ
F：根拠と感想の区別
G：書き出し
H：結び
I：構成の工夫

生徒氏名	作 品 名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	e 総合判定	j 作品完成後自己評価
	a 「少年の日の思い出」	c 短 作 文 教 師 評 価										
	b 感想文題名	d 感 想 文 教 師 評 価										
	f 創作文終了後自己評価 (1学期の実践終了後)	g 読書感想文主題					i 構想表完成後自己評価					
	h 読者に訴えたいこと											
1	「少年の日の思い出」	A			A	B	A		A	B	AB	この感想文を書いて最後の人間の心の中を書く所ですごくなやみました。でも、自分の心の中と比較ができ、ちゃんとまとまったのでよかったと思います。今までは、最後に必ず「思います」という文がきていたけど、この作文でそういう所をなくしていくとうまくいきました。
	もっと大切なことを……	A	A		A	A	A			A	A	
	今後感動的なシーンにするために、もっと現実味のあるようにして、ごちゃごちゃしないで、1つのことを中心にしてくわしく書きたい。 もうすこし転で悲しくて、結を長くしたい。	勉強や学校にはいることより、もっと大切なことがある。					むすびで主題を大きく使えたので、うまくいったと思う。もっと自分の意を書けなかったところが、不十分だった。自分の生活と比較できず、残念だった。					
	小さいころから勉強、勉強とじばられている人が多いように思う。											
2	「少年の日の思い出」	B	C			B	A			C	BC	主題が通り、一応書き出しと結びがつながった。説明が少なくてうまくいかなかった。わりと分かりやすく書いて、予想よりいいと思う。次に書くとしたら、登場人物の気持ちも入れてかこうと思う。
	世の中の不公平	A	A		A	A		A		B	AB	
	もっと同じ場面でも一文一段落で終わらないようにしてもっと話を長くしたかった。もっと王様に話をするとところで具体的に会話文を入れて書いたらよかったと思う。段落が一文か二文でなく、四・五文で詳しくしたらよかった。	子供も大人も、同じような感情がある。 大人と子供は、大きさがちがうだけで、悲しみも同じようにうけるということ。					順番がちゃんと並べられたけど、同じような内容になり、自分と比べる所が少なかった。主題にあった内容が書け、一応よかったと思う。					

構成力を高める読書感想文の指導

	「少年の日の思い出」	B		A		A	AA	A		A	A		どこの内容をどう取り上げて他の感想とつなげていこうかが一番僕にとってむずかしいです。一つのことを書いたら、それでもうほとんど後につながらないから、そこをもっとがんばりたい。
	宿命の子供たち		B	A	A		AA	A	B	B		AB	
3	真剣なことを全体にかいていて、もうちょっと入れられるところで笑いを入れれば、もうすこしいのができたかなと思う。まじめに考えすぎたかなと今は思っている。今度はもうちょっと気楽に楽しく書いていきたいです。	子供にも、不幸で悲しくなるときや、うれしくてたまらない時がたくさんある。 子供たちの思っている本当の気持ちを知ってほしい。						僕がこれはいいと思っ ているところをきちんと文 章にぬきだせているので いいと思う。まだ、不十分 と思うのは、かんぜん に全体のようにてんがつか めていないことだ。					
	「少年の日の思い出」	B		A		B				A		AB	疑問点はないんだけど、書きおえた感想はとてもよかったと思います。始めは文が長いところとか「思います」が多かったけど、先生に言われたりしてうまく書けたからです。書き始めた時は、先が心配だったし、内容もまとまっていなかったけど、今は、気持ちもすっきりしてよかったです。
	勇気と賢さ	A	A	A	A		A	A	A	A		A	
4	もう少し辺りの様子や説明みたいなのを書いてわかりやすい物語を書いたらよかったと思いました。うまいったと思うところは、ギャグというか、おもしろくするところがよかったと思います。まあまあいいのができたと思います。	正義先生と少年たちが、大きくなっていて、いろんなことをのりこえていく様子。 家で家族と暮らしているのと、寄宿舎で暮らしているのを比較して、マルチンの強さをみてみたい。						題名や書出しと結びが、他よりうまいった。でもいまひとつ不十分なところは、カードの作品が7枚のうち、意見が1枚しかできなかったところだ。主題にそって書けたのでよかった。					
	「少年の日の思い出」	C	C	A	C	A		A		B		B	主題と結びはつなげたけど、作文で書きたいことはまだまだある。次は冒険物を書きたい。
	ハンスゆえに……		C	A	A	B	B	B		C		B	
5	ナレーターの部分とのつながりがうまくいかなかった。時間の経過がわからなかった。物語としてはハッピーエンドだった。	ハンスが言えなかったつらさ、身のつかれ、心の弱さが死を導いたと思う。結局はだれが悪いのか分からないけど、まわりの人々のはげましが、ハンスの圧力となっていたと思う。						すべてにおいて、うまくいっている。自分の思ったり、気付いたりした所を書いているから。					
	「少年の日の思い出」	B	C		A	B				B		BC	比較の文がなかったので、直すとよい文ができた。先生に見てもらえなかったけど、けっこう悪くはないと思います。でも、つなぎの所があまりうまくいかなかったの、これから直していきたいです。
	先生と生徒	A	A		A		B	A	B	B		AB	
6	もう少し結のところの最後の所をもっとくわしくしたかった。	先生がどれだけマルチンのことを思っているか。						うまいった所はあまりないけれど、考えと作品がまざったり、うまく考えがまとめられなくて意見などあまりきいてほしい所がうまくけなかった。					

4, 考察 —T男とE子の変容 より—

習作の「少年の日の思い出」の感想文を分析した結果、能力的にほぼ似通っていると思われる2人の生徒の、授業過程を通した変容を見てみたい。

T男

この「少年の日の思い出」はヘルマン・ヘッセというドイツの人が書いた話です。

この話は、ちょう集めから事件が起こります。

主人公が、クジャクヤママユというちょうがとてもほしかったところで、気味悪いほどの模範少年エーミールがさなぎからかえしたという、うわさを聞き、ぬすんで、つぶしてしまうという内容です。

この話は、情景がくわしく書いてあり、特に「明るいランプの光り輝いた」という所がいいです。

また、最後にちょうを一つ一つつぶすという所が、償いのためにしたように思います。

—— 略 ——

この話は、作者がノーベル賞を取っただけあって情景や、登場人物の心情などが、とてもよく書いてあって、心が冷たい模範少年や、気持ちに押されて初めて泥ぼろした主人公や、夜とちょうの様子が、本当にまわりがそんな様子と思わせるように書いてあります。この話を一度読んでみて下さい。

▽

E子

この作品は、ヘルマン・ヘッセという人が書いたものです。

この人は、「車輪の下」や「青春はうるわし」のように、とても有名な詩人・小説家です。

私が読んだ、「少年の日の思い出」は「私の客の少年時代の僕」が主人公です。この「僕」は、ちょうの収集家だったけど、その思い出をけがしてしまったはなしです。

そしてもう1人だいじな人がいます。

それは、「エーミール」です。

「僕」は「エーミール」のちょうをだいなしにしまったのです。

でも、「僕」のいい所もあります。それは、エーミールにちゃんとあやまったことです。言わなかったら、わからなかったのに……。

まだ、あります。自分がどれだけ悪いことをした。ということがとてもよく分かっていると思うからです。

この物語の最後の文に、「ちょうを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶしてしまった」とありますが、わたしは、この「僕」の気持ちが、どうもよく分かりません。私なら多分指で粉々に押しつぶしたりはしないと思います。

▽

世の中の不公平 (『飛ぶ教室』より)

世界には、不公平なことがたくさんあります。大人の感情の方が、子供より大きいとも思われています。お金のある人の方が偉いと思われています。この作品でも、そのために、たくさんの人が苦しんでいると書かれています。

文中でも、
「子供の涙は決して大人の涙より小さいものではない。」

と、大人と子供の不公平について、たいへん強く書かれています。

この物語には、マルチンという、日本でい

家族愛 (『にんじん』より)

「どうしてルピックのおかみさんは、にんじんがきらいだったのか。」私がこの本を読んで、一番疑問に思ったところです。普通の家族なら、末っ子をとててもかわいがって、一番大切にします。

では、どうしてルピックのおかみさんは、にんじんを愛そうとしないのか、ほかの二人がかわいすぎるのでしょうか。それとも、にんじんを家族と思っていないのでしょうか。わたしは、どちらにしる母親の無神経なところからきていると思います。

う高校一年の少年が登場します。マルンは、その学年の中心になるような正義感の強い少年です。でも、こんなマルチンにも、一つだけなやみがあります。それは、家にお金がなくて家に帰れないことです。マルチンは、親よりも、たくさん泣いています。このことから大人の方が子供より大きい感情があるとなります。

—— 略 ——

でも、親は二人います。(略) 多分両親の二倍も三倍も悲しくて、自分がマルチンなら、きっと学校から逃げ出しています。

物語だとマルチンはそうせずに泣いているところをベク先生に見つかり、20マルクもらいます。この人は、マルチンと同じように、正義のためにどんなこともします。

僕は、大人・子供・金・位・や名誉を持っている、持っていないでは、人間は決まらないと思います。そんなのではなくて、ベク先生のように、大人・子供の区別なく、同じ人間として認めている方が、一番立派です。

子供の涙も、この作品のようにとても大きい重い深いこともあります。こういうことは、子供だから、大人だから、ということはないと思います。大人・名誉が一番偉いのではないので、僕も、思いやりのあるベク先生のようになりたいと思います。

—— 略 ——

にんじんは、自分の立場がよく分かっています。こういわれれば、ああいうことが一番、にんじんが知っていたような気がします。兄からも、姉からも見離されて、心細かったにんじん。そんなにんじんでも、父親には、愛されていました。にんじんは、父さんという時が一番楽しいのだと思います。

—— 略 ——

父さんは、にんじんを愛しているけれども、けっしてかまってやったりはしていません。でもそれは表だけで、裏ではかわいくてかわいくてしかたがないのだと思います。

—— 略 ——

『もし、ぼく、自殺しようとしたことがあるっていったらどうする?』私はこの一文を読んで、ここまで思いつめていたのかと思いました。

—— 略 ——

でも、にんじんは家出でなく、自殺を取ったのでしょう。私とにんじんを比べて見たら、にんじんは不死身に思えます。

私がこの本を読み終えて、ふと思ったことがあります。私が家族にどれだけ愛されているか、ということです。にんじんの家族と見比べたら私は、親からも姉・弟にも見離されていません。母からもいじめられていません。それに比べたら私は、弱虫でわがままな人間に思えます。今、思えば、当たり前のように思っていた家族が、自分にとってどれだけ大切な物なのか、愛とはどのような物なのか、今やっと分かったような気がします。

習作の方の感想文を比べてみると、双方ともに、「一文一段落の段落構成であること」が特徴として挙げられる。段落の意識が明確に育っていないため、文章構成も、羅列的でまとまりがない。しかし、実作の方を読んでみると、段落が一応成立しており、作品の中から、問題意識を自分なりに掘り下げていることが分かる。主題についても、最初から最後まで、一貫して書こうという意識づけがなされているように思う。完全とは言えないまでも、学習過程の中で、文章表現能力が高まったと言うことができよう。

そこで、この二人の自己評価の実態を見てみたい。

(一学期の実践終了時)

もっと同じ場面でも一文一段落で終わらないようにしてもっと話を長くしたかった。段落が一文か二文でなく、四・五文で詳しくしたよかった。

(一学期の実践終了時)

ちょっと常識はずれにしすぎたと思う。最後の二行を工夫したためにミステリーになったのでよかった。

(今回の実践終了後の自己評価)

主題が通り、一応書き出しと結びがつながった。説明が少なくてうまくいかなかった。わりとわかりやすく書いて予想よりいいと思う。次に書くとしたら、登場人物の気持ちも入れて書こうと思う。

友達の意見を聞いたら、「結びをもうすこしまとめた方がいいと思う」という意見が多かったので直そうと思った。いつもよりは上手に書けたと思う。結びもまとめられたと思う。私は前まで構想表等では書かないでやっていたので、あまりうまく書けませんでした。でも、構想表があるとすらすら書きました。

下線部に示したように、今回の実践終了後の評価では、構成面から作品を評価しようという意識が育ってきている。T男の場合は、一学期以来、継続した課題意識で文章表現活動に取り組んでいることがうかがえる。

また、学習活動全体を通じて、それぞれが、効力感を獲得していることも読み取れる。以上二点から、彼らの文章表現能力の高まりが、その認識の面からも、指摘できる。

5、まとめ

資料3に示した表現能力評価表に基づいて、構想表完成後および作品完成後の生徒個々の自己評価の観点を分析してみた結果、次のようになった。

- ・ 結び（書き出しとの関連も含む）・・・23名
- ・ 書き出し・・・2名
- ・ 主題・・・11名
- ・ 段落の接続・・・12名
- ・ 題名・・・14名（それぞれの観点を挙げている生徒の
- ・ 文のレベル・・・2名 のべ人数を示す。）

この結果をそれぞれの生徒の表現能力と重ねて考察してみると、

- ・ 表現能力の上位レベルにある生徒に「主題」の観点を評価している傾向が見られる。
- ・ 文のレベルでしか評価できない生徒は、依然として表現の能力は高まっていない。

という二点が、特徴として挙げられる。

しかし、一学期に行った創作文「起承転結の構成で書こう」の自己評価では、構成面から評価した生徒が17名であったのに比べ、今回の実践では、38名の生徒が、自己評価で構成への着眼をしている点は、収穫であったように思う。その要因として、

- (1) カードを使うことにより、段落意識が明確化した。そのことで、書き出しと結び、あるいは段落の接続を目で確かめながら、構想を立てることができた。
 - (2) 学習過程の中間段階で構想発表会を設定したことにより、読み手意識が高まり、そのことが書く作業への意欲づけとなった。
 - (3) 主題決定段階で、指導者による個別指導の場を設定したことにより、構成の作業が比較的容易になった。
 - (4) 例文として使用したのが小学校5年生の感想文であったため、以後の学習活動に対する抵抗感が比較的和らいだ。
 - (5) 読書感想文という領域自体が、主題と構想に重点を置いた指導に適している。
- などの点が考えられる。(1)(2)の参考となる生徒の言葉を挙げてみる。

- ・うまういったと思う。それはこのようにして、書いていくと、段落のつなぎ方などが、目を通すだけで分かって、本番の時にまちがえないで、すむと思う。あとのこととか考えながらできる。(H男の自己評価より)
- ・はじめて、構想などから組み立てていった感想文だったので、できはどうあれ、いい文になったと思います。構想で、書き出しと結びをつなげたらいいということがわかり、書き出しと結びがよくできたと思っています。みんなで話しあったことを大切に考えていけたらいいと思いました。(K子の自己評価より)

また、自己評価の中に、「よかった」「うまういった」などの効力感に結びつく言葉を表記した生徒は、25名となった。これだけで効力感が高まったと結論づけることは、短絡的すぎるが、次の作文単元への動機づけにはなるであろう。

しかしながら、反省の材料として、次の2点が残った。今後の課題としたい。

- (1) 生徒の精神的な発達段階を考慮して、作品完成後の相互評価は行わず、教師評価だけとしたこと。
- (2) 構想表のみによる評価活動で、しかも作品が同一でないという特性上、評価の観点が「書き出し」「結び」「比較のしかた」「反論の入れかた」までとなっていること。

以上

(注) (1)『自己学習能力を育てる——学校の新しい役割——』波多野誼余夫編・東大出版
1980

(参考文献)

- ・『作文指導事典』 井上敏夫・倉沢栄吉・滑川道夫・藤原宏編 第一法規1971
- ・新版学年別作文集『5年生の作文』 滑川道夫編 小学館1971
- ・作文教育新講6「作文指導の領域と方法」倉沢栄吉監修・森久保安美著 新光閣1979
- ・最新国語科指導法講座3『作文・書写の指導』飛田多喜夫・小林一仁編 明治図書1983
- ・教職研修総合特集No68「作文指導読本」 教育開発研究所1990
- ・中学校国語科の指導事例集5『表現活動の新しい指導展開』北川茂夫編 明治図書1991
- ・中学校国語科指導細案5「作文・話すこと」 北川茂夫編 明治図書1992
- ・「学習指導と認知心理学」E.D.ガニエ著・赤堀侃司・岸学監訳 パーソナルメディア
1989